

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版

# ナイン の カンパニー の 秘密

小説 あらおし悠  
挿絵 ひでぼう



第一章	スケバンと生徒会長と委員長	006
第二章	生徒会長と保健室	039
第三章	スケバンと初デート	085
第四章	スケバンとバスルーム	140
第五章	朋華と霞直	192
終章		244

## 登場人物紹介

Characters



あめみやともか  
**両宮朋華**

圭介のクラスの委員長。真面目な性格でやや融通が利かない一面もあるが、本当は優しい。出会いが悪かったため、圭介にはきつく当たってくる。



かなお  
**霞直**

圭介が電車の中で出会った謎のスケバン。朋華や円香と何らかの関係があるみたいなのだが…？



かつらぎけいすけ  
**葛城圭介**

両親の離婚が原因で転校してきた少年。暴力が嫌いで、特に女の子が暴力を振るう姿は放っておけない。

あめみやまどか  
**両宮円香**

朋華の姉で、生徒会長。普段はおっとりしているのだが、スイッチが入るとエッチになってしまう。

「私も、初めて。……圭介くんを初めて見た時から、可愛いと思ってた。だけど……こんな気持ちになるなんて……。たった今……霞直を任せるって言ったばかりなのに……」

伏せた睫毛を震わせて、円香は綺麗な形の唇を噛んだ。まるで、理性と、感情と、身体の中に渦巻く欲望とが争って、身動きが取れなくなっているかのように。苦悩する彼女をどうにかしてあげたくて、手を伸ばし、髪を撫でた。その途端。

「圭介くん……」

甘えたような声を上げると、まるで糸の切れた人形のようにカクンと上体が落ちた。膝枕したまま圭介の頭を抱え込む。垂れ気味の目が一層下がって、トロンとしている。濡れた瞳が、熱い視線が、圭介の目を覗き込む。完全に「スイッチ」が入っていた。どこか悲しげな笑顔を浮かべたかと思うと、激しく唇を擦りつけてきた。

「圭介くん……圭介くん……！」

「ふむっ……ま……まどか……ひゃん……」

痴女に豹変した円香のキスに翻弄されて、下半身に血液がドッと流れ込む。この前のように毛布で隠されていなかったため、唇を離した彼女に、ズボンの中で起きた変化を目撃されてしまった。

「そういえば、また霞直に蹴られたのだったわね」

ふっ……と、唇にかかる円香の熱い吐息。掌が圭介の股間に伸びる。今度は躊躇がなかった。五本の指が、布地にその形をハッキリと映し出す突起をギュッと握り締めてきた。

「はうっ！」

喘ぎながら反らせた喉に口づけられる。しかし、その体勢では動きづらくなったのか、円香は圭介の頭の下から太腿をそつと抜き、添い寝するように横たわった。シーツと制服が擦れる音が、カーテンで仕切られた小さな空間で、やけに大きく、卑猥に響く。

「もうしないって決めたのに……圭介くんが大きくなるから悪いんだからね」

理不尽な恨み言を吐きながら、ズボンの膨らみに指を絡ませてくる。もう一方の腕を圭介の腰の下に潜り込ませ、緊張に震える身体をぐいっと抱き寄せた。

(あ……先輩の……円香さんの匂い……)

擦り寄せられた首筋からふわりと香る、少女の芳香。甘い匂いに反応した勃起がひくついてトランクスに擦れ、思わぬ気持ちよさに、ぶるつと細かく身震いする。腰を貫く疼きに流されてしまいそうだ。しかし頭の隅では、やめさせなくてはと理性が叫んでいる。

「だ、ダメです円香さん、こんなことしちゃ……。また、後悔し……はう！」

股間をグツと握り潰され、快感と痛みの狭間で言葉が途切れる。

「後悔なんてしてないわ。この前だって……今だって」

「で……でも、こういうことは、好きな……ひ、人と……！」

ズボン越しにペニスを握る手に手を重ね、動きを制する。しかし圭介にできたのはそこまでだった。性器を採まれる快感には勝てず、払いのけるまでに至らない。

「確かにね、この前は圭介くんのこと、ただ可愛いなって思っただけかもしれない。でも

今は違ふの……。あなたが……女の子のことを本気で考えてくれる人だって、分かったから……。だから……。私……」

「ぼ、僕は、そんな立派な人間じゃ……。あ……。っ！」

首を振る圭介を黙らせるようにペニスを包む指に力が入り、甘美な痛みで呻きを上げる。「圭介くん、霞直のことで心を痛めてくれたわ。それに、私のことも庇って、怪我までして……。私……。私……。圭介くんのこと……。」

何かを叫ぼうとして、しかし円香は、そのセリフを飲み込んだ。その代わり、激しいキスをぶつけてくる。顔をクネクネと捻じ曲げながら、熱い唇を擦りつけた。

「ああ……。こんなこと、誰彼構わずなんてしない。ちゆる、んああ……。あなただから……。圭介くんだから……。ちゅ……。んちゅ……。」

—— シュリシュリ……。シュリシュリ……。

年上の少女の掌が、圭介の手を重ねたまま、制服のズボンを擦る。その掠れるような小さな音が耳朶の中で何度も何度も反響し、羞恥心で腰がくねった。

「それにね……」

円香が股間から手を離す。ほっと息を整える間もなく、今度は仰向けの圭介の腹を跨いできた。女性に馬乗りされ、身体がベッドに沈む。腹にのしかかる、女の子のお尻の張りのあるまろやかさに、脇腹を挟む太腿の柔らかさに、そしてその生々しい重みに、屈辱感よりも異常な興奮を覚え、吐息が荒くなり、下半身では陰囊がキュッと締まった。

「女の子だって、えっちな気分になる時だってあるの……。我慢できなくなる時があるの……。それなのに、やめろだなんて無粋……。いいえ、意地悪よ」

「で……。でも、やっぱダメですよ、こんな……。ふむう！」

なおも尻込みする圭介を咎めるように、両の掌で頬を挟み込み、上下の唇を小鳥のようにチュッチュと啄ばんでくる。荒い息で拒みながら、下唇を少女の柔らかな唇に挟まれると、うっとり目を閉じてしまう。

「はあ……。はあ……。こ、こんな、の……」

トントンと円香の舌がノックした。無意識に、固く結んでいた唇をかすかに開く。そのわずかな隙間をこじ開けるようにして、濡れた肉片が強引に割り込んできた。

——にゆるん。

「んむっ!？」

異物の侵入に息を詰まらせる。しかしザラリとした舌の表面が擦りあうと、ゾクゾクッと快感が背筋を走り、二人の目がトロンと蕩けた。

「ぶはあっ……。なにこれすごい……。キス、気持ちいい、とってもいい……。んむうっ!」

円香も想像以上の悦楽だったのか、夢中で圭介の唇を吸った。顔を傾け、より深いところへと舌を差し込んでくる。背中がむず痒くなるような妖しい快感。二人は初めてのキスに、赤く濡れた肉片同士の睦みあいに、我を忘れてのめり込んでいった。

「圭介くん、可愛い!」

——れろれろ、れろんっ！

甘い唾液を纏いながら、円香の舌が口腔内を蹂躪する。ザラつく表面と、ぬるつとした唾液の異なる感触が、敏感な味覚器官に新たな感覚を、快感を教え込む。口腔内でクルクルと踊る少女の舌が、頬の内側、歯茎にまで食指を伸ばす。口腔内の粘膜を全て舐め尽くすような貪欲なキスは、とても初めてとは思えない。下半身への愛撫はないのに、ズボンの中で陰茎が疼いて、今にも白い粘液を発射してしまいそうだ。

——くちゅくちゅ、ぴちゃ……。

「んぷはああ……。しゅ……。しゅごいれす……。ま、まろか、しゃああん……。！」

舌を絡み取られ、呂律が回らない。じゅるじゅると唾液を交換する卑猥な音が、脳を官能色に染め上げ、痺れさせる。

(は、初めてなのに……。こ、こんなキス……。気持ちよすぎるうっ！)

全身を貫く快感に震えながら、円香の制服にしがみつく。女性の唇に、舌に翻弄される。まるで自分の方が初心な少女のようだ。しかし今の圭介は、美少女に蹂躪される屈辱感すら、堪らない快感になっていた。

「んふああ……。キス、すぐく気持ちいい……。ちゅるっ……。でも、まだよ……。まだ試したいこと、いっぱい、あるんだから……。ちゅぶ……。ちゅるるッ！」

日頃興味を持ちながら実践できずにいたことを、この際、圭介の身体でしてしまおうというのか。普段の圭介なら、女の子がはしたないと思うところだが、肉欲に支配されてい



るのは円香と同じだった。キスに興奮した勃起ペニス、少女のお尻をつついてる。円香はそれに押しつけるように、腰をクリクリとくねらせた。

「んぶあああ……ン……！ はあ……おちんちん、硬い……」

銀色の糸を引きながら、円香が上体を起こす。形のいい顎についた唾液をペロリと舐めた、恥ずかしげでありながら、妖艶さすら漂わせ、しかし、どこか切ない光を宿らせる、彼女の笑み。

「円香さん……」

もっともつとキスしていたい。ねだるように、媚びるように唇を小さくパクパクとさせる圭介を見下ろしながら、円香は、もどかしげに濃緑色の制服のボタンを外した。その内側から現れたのは、ブラウスをドーム状に突き上げる小高い丘。下から見上げると、正面から見た時よりも、そのポリウムを実感して、思わずゴクリと唾を飲み込む。臙脂のリップタイをシュルッと緩めると、呆然と見上げる圭介の手を取った。

「ね、ここからは、君が脱がせて……」

圭介の目の前で、乳房が、少女の象徴の膨らみが、呼吸するたび、まるで誘い込むかのように小さく上下する。女性の服を剥ぎ取ると思うだけで、極度の緊張に指が震えた。それでも円香は動かない。あくまで圭介に脱がせて欲しいようだった。

まるで凍える指を暖めるように、ガチガチに強張った拳に息を吹きかけ、改めてブラウスに挑んだ。先はまだ長い。こんなところで立ち往生している場合ではない。プチ、プチ

と、ひとつずつボタンが外されるたび、露わになる円香の白い素肌。汗ばむ柔肌と、深い谷間。それを縁取る、レモンイエローのフリル。

(ブ、ブラジャー……!)

初めて間近で見る女性の生下着に、むしろぶりつきたくなる衝動を抑え込み、前をはだける。

「は……はあああああ……」

長い長い、感嘆の溜め息を吐く。長髪の美少女が、制服を羽織ったまま、その前だけを露わに圭介を見下ろしていた。薄く紅を差したかのような上気した肌に、首に絡んだ臍脂のリボンタイと、レモンイエローのブラが花を咲かせている。

「き……綺麗です……」

心からそう思った。いつまでも眺めていたかった。圭介の賞賛に気をよくした円香が背中を手を回す。プチッという小さな音と共に、少女の胸を締めつけていたレモンイエローのカップが緩み、横たわる圭介の目の前にぶら下がる。

——ぶるん。

(お……おっぱい! 先輩の……円香さんの、おっぱい……!!)

うっすらと静脈の浮く白い肌。贅肉など全くついてない滑らかなお腹。強く抱き締めたら折れてしまいそうな細い腰。それは一見すると、か弱そうな少女の肢体。しかしその上には、脆い印象を吹き飛ばしてなお余りある圧倒的なポリウムと迫力で、まるやかな乳



女性が絶頂に喘ぐ姿に、嬉しさと驚きで胸がいっぱいになる。その一方で、肉欲に疼く下半身は最高潮に興奮していた。硬直した肉勃起を、ヒクヒクとしゃくり上げる。

「霞直さん……」

もう、圭介も限界だった。いまだ絶頂後の脱力感から回復していない少女へのしかかり、開いた太腿の間に自分の腰を押し込む。首筋に光る汗をうっとり舐め取り、ピクッと痙攣する肢体を抱き締め、勃起の先端を、濡れた秘貝にあてがった。

「——！ ダメッ!!」

オルガズムの快感に呆けていた霞直が、自分の性器の異変に驚き飛び退く。圭介は、催眠術から醒めたように我に返った。自分が何をしようとしたのか思い知る。

「ご、ごめん！ ぼ、僕……君の気持ちも考えないで、無理矢理……」

「違うの！ 嫌じゃないの！」

「え？ それって……」

その言葉の意味するところに気づき、喉を詰まらせたように赤面する霞直。それはつまり、その胎内に圭介を受け入れてもいいということ。しかし。

「今は、ダメ。……アタシだって、圭介と……。でも……この姿では嫌、だから……」

（……こんなに可愛いのに……何が不満なんだろう。でも……これは、霞直さんの意思を一番大事にしなきゃいけない）

治まりきらない性欲を持って余した、剥き出しの勃起をしまおうとする。その手を、霞直

の小さな手が押し留めた。

「挿れるのはダメだけど、その代わり……」

霞直は圭介をソファに座らせ、開いた脚の間に跪く。頬を紅潮させた顔を上げ、恥ずかしそうにはにかんだ。その顔を狙い撃つように急角度で屹立する灼熱の肉ロケットを捧げ持ち、両手でふわりと包み込む。

「口で……してあげるから……」

——ちゅっ。可憐な唇で、欲望の雫を垂れ流す先端に口づけた。

「はわわ!? か、霞直さん!」

小さな吐息が亀頭をくすぐった。ゾクゾクッと快感の甘電流が、脳天まで駆け上る。

「な、舐めて、平気なの?」

「ピクピクってしてて、別の生き物みたいで、ちょっと怖かったけど……でも、圭介のおちんちんだって思ったたら、何か可愛く見えてきた。それに……圭介も、アタシの舐めてくれたし……」

うっとりとした眼でペニスを見詰め、鈴口から溢れる雫を、啄ばむようにチュッチュと吸い上げる。あの霞直が、自分の性器にキスをしている。出会った時には考えられない光景に、圭介の身体は率直に悦びを示した。高鳴る心臓の鼓動に合わせるようにペニスが脈打ち、粘つく先触れ液が彼女の唇を汚す。それはひどく背德的で、淫靡な眺めだった。

「変な味……。でも、美味しい……」

「か、霞直さんのものも、美味しかったよ！」

「バカ！　そういう変なこと、言わなくていいのよ！」

霞直はお仕置きのように、先端をパクリと咥え込んだ。生暖かな口腔粘膜に包まれ、蕩けるような甘美な疼きに、精液が漏れそうなほど肉竿がビクンと跳ね上がる。

「ふむっ！」

口蓋を刺激されて息苦しそうに顔を顰めるが、吐き出そうとはしない。息を整え、一気に根元までズブズブツと飲み込んだ。

「あ！　あうあああああっ!？」

ただ霞直も、口いっぱい頬張ったペニスを、どう刺激していいのかわからないようだった。不躰な侵入者である肉棒に居場所を奪われた舌が、野太い胴の裏筋を掠める。

「ふわウ!!」

「んぐ……ふあ…………。こえ、気持ちいいろ？」

突然暴れたペニスに喉を突かれて苦しかっただろうに、口に咥えたまま、上目遣いで尋ねてくる。圭介が頷くと、唇の端で満足そうに微笑み、くるくるつと舌を絡め始めた。

「あ……あ……気持ちいい……！　霞直さんの舌、ぬるぬるして……ぼ、僕のに……！」

腰が動く。温かい唾液でぬめる霞直の口を犯す。だがフェラチオ初心者の彼女は、勝手に動かれては困るのか、鍛えた腕で暴れる腰を押さえつけ、自分から首を振って、プルンとした唇でペニスを抜き出した。



「すごい……大きくて、顎、外れちゃいそ……んじゅ、じゅぶ！」

「あああああう！　そ、それ、気持ちよすぎ……ひふわあああつ！」

「んぶあ……そんな可愛い声で悶えられたら、アタシも……興奮しちゃう……あむ」

圭介が感じているのが嬉しいのか、男性器を舐めることにすっかり躊躇もなくなつて、唇で幹にキスの雨を降らせ、舌で亀頭を舐り回した。

「じゅるるっ！　……はああ……ねえ圭介……いっばい、いっばい気持ちよくしてあげるから……これからも……アタシを守ってくれる？」

自分の唾液と先触れ液で掌をベタベタにしながら肉棒を懸命に扱き、殊勝なおねだりをするスケバン。その意外に気弱な瞳に、圭介はすっかり心を奪われていた。

「守るよ、君を！　でも、こんなことされなくても僕は……ああッ!!」

再び口の奥まで飲み込まれる硬直ペニス。純情なスケバンの激しいフェラチオが、圭介を、肉棒を、絶頂に追い込んでゆく。

——じゅっば、じゅっば！　ぶじゅるッ！

「あう、うあああ……で、出る、もう……もう……！」

警告したのに、霞直はペニスを唾えたまま離そうとしない。長い睫毛を震わせながら、ますます激しく、唇と舌で射精を促す。圭介は下半身を襲う危機感に歯を食い縛った。

「あ、いく……出ちゃうから、もう本当に出ちゃうから、早く離して！」

このままでは彼女の口の中に射精してしまう。しかし快感を止めたくない。相反する思



いは、しかし長くは続かなかった。すぐに快感が理性を押し流す。左手でソファに後ろ手を突き、右手で霞直の黒髪を撫でながら、腰を突き上げて口を犯す。じゅぷじゅぷと唾液を飛ばしながら、霞直も男性器にむしゃぶりつく。

「気持ちいい、霞直さん……霞直さんッ!!」

まるで精液を吸い尽くそうとするような口唇愛撫に、下半身が悦楽に疼く。灼熱の精液が、肉棒の中を暴れながら駆け上る。

「んはア……おちんちん……はむン! ぶじゅ、じゅばっ、じゅばっ、ぶじゅるるッ!!」  
「で……出……はうあ! 霞直さ……ふわあああッ!!」

限界を迎えたペニスが、思いきり跳ね上がった。あまりの勢いに口から飛び出してしまふ。それと同時に、彼女の目の前で、灼熱の白濁液が迸った。

——どぶどぶ、びゅるる! びちゃびちゃッ!!

「ああ……いっぱい出てるっ! 圭介の精液……熱……はふふあああ……」

紅潮した顔が、どろっとした白濁粘液で汚される。青臭い目潰しを食らいながら、霞直は恍惚の表情で、唇に垂れ落ちる精液を、そっと、舌で掬い取った。

それに勢いでごまかしてはいたが、彼女は圭介の疑問に答えていない。覗かれないようにするためとは言いが、今日のデートで風呂に入ることをご想定していたのだろうか。

階下から、シャワーを使う音がかすかに響いてくる。家の周囲は車の通りも少ない。静かになった環境で寝転がっていると、否が応にも彼女の息づかいに耳を澄ませてしまう。どんな姿でシャワーを浴びているのか。どんな表情で、何を考えているのか。視覚情報が遮断され、浮かんでくるのは、見知ったばかりの彼女の裸身が、圭介を誘惑するように痴態を見せる姿ばかり。これでは覗き見より性質が悪い。

「霞直さん、目隠しは逆効果だったみたいだよ」

やがてシャワーがやんだ。階段を上ってくる軋んだ音。部屋に入ってくる気配。しかしその後が続かない。そこにいるのは確かなのに。もしかして、別の誰かが自分を見下ろしているのではないか。目が見えないのが、こんなに心許こころもとないものだったとは。タオル一枚で裸同然の、頼りない格好も手伝って、不安ばかりが心に広がる。

ギシッと、ベッドが軋んだ。その誰かが、傍らに膝をつく気配。

「圭介……」

愛しい少女の、囁くような声に安堵する。横向きに寝ていた肩に手を掛けてきて、仰向けにされた。彼女もバスタオルを脱いだのだろうか、何か床にぱさりと落ちる音。空気が動いて、霞直がふわりと覆いかぶさってくる。

「あ……」

ぴくつと身体が小さく跳ねた。湯冷めして硬くなった、ゴマ粒のような男の乳首に、温かい舌が這ってきたのだ。

「あ……あ……!?」

もう一方の胸も掌で揉んだり、乳首を爪でクリクリと摘んできたりする。じわじわと、ぬるい快感が身体の中に広がってきて、まるで女の子のようにクネクネと悶えてしまう。

(む、胸、気持ちいい……。僕、男なのに、胸を揉まれて、こんな……。ああっ！)

しなやかな舌が、螺旋を描くように、ねっとり唾液を塗りつける。その愛撫と甘い香りに、圭介はうっとりとしてしまう。一方で、少女の指は正中線を辿っていた。下へ下へと降りてきて、腰に巻いたタオルをはらつと開く。手錠で縛られた手首が腰の下にあるので、半勃起状態のペニスを、無防備に突き出した姿勢になっていた。

「は……。恥ずかしいよ」

「ううん、素敵よ……」

いつもの霞直とは違う、静かな声。思い返せば、はしゃいだり、落ち込んだり、感情が発露した時の彼女は、声色が変わることがしばしばあった。しかし今の彼女は、これまでにないくらい穏やかさ。

首筋に顔が埋められ、頸動脈を舐められる。寒気にも似た心地好いゾクゾクが、身体中を駆け抜ける。脇腹から太腿、爪先まで舐められて、どこでそんな愛撫を覚えたのかと驚嘆した。再び太腿を這い上がり、いよいよ身体を中心かと期待を高めるが、その手前でコ

イスを外れた舌は、焦らすように脚の付け根のラインを、何度も何度も往復する。

目隠しされているせいか、いつも以上に全身の感覚が鋭敏になっていた。身体を這い回る舌、肌をくすぐる指先、そして、興奮して荒い吐息。風呂上がりの彼女の匂い。それら全てが、圧倒的な存在感で圭介を包み込む。

(やっぱり、こういうプレイがしたかったんじゃないか)

一人で納得しかけ、しかし、急にこんなことを始めた彼女の態度に、どこか引つかるものを感じていた。その霞直は、愛撫に集中しているのか、さつきからずっと無言だ。

いつまで経っても触ってもらえないペニスは、待ちきれなくなって、直接の愛撫をねだるように、ゆっくりとその身を起こし始める。ビクンビクンとしゃくり上げながら胴回りを膨らませ、天井を指して鎌首を伸ばす。そこへ、ほっそりとした指が絡みついてきた。待ち望んでいた少女の指が。しゅるしゅると扱かれるうちに、柔らかさを残していた肉槍が、徐々に凶器のような硬度を取り戻す。

「か、霞直さん……」

完全に勃起したその先端に、温かい息づかいを感じた。つるんとした亀頭に、舌先でくると螺旋を描きながら、野太い肉棒を飲み込んでゆく。睨丸もころころ転がして、性器の全部を彼女に愛撫された。

「こ、今度はやけに念入りだね？」

いつもよりも丹念な口唇愛撫。ペースがゆっくりなので即射精には至らないが、その分

じわじわと、ぬるま湯のような心地好い性感が昂ってくる。

「圭介のこの形……しっかりと、覚えておきたいの……」

その言葉の意味を、圭介は深く考えなかった。考えられなかった。湧き上がる快感に、霞直さんはエッチだなあと思っただけ。

十分に濡らしたそれを、温かい口腔が一旦解放した。ちゅぽんと音がして、幹をつーつと唾液の雫が伝って落ちる。

「霞直さん、手錠とマスク、外してよ。ぼ、僕も、霞直さんを……」

彼女の肉体を味わいたい。しかし、訴えの一部は却下された。

「マスクはダメ。絶対に」

それでも、寝転がっていた圭介を抱き起こし、背中に腕を回して手錠を外してくれる。いつまでも暗闇の中に置き去りにされるのは不安だったが、とりあえず手が自由になったことで、幾分かの安心を取り戻した。

「じゃ、今度は僕の番」

少女をベッドに押し倒そうとしたが、どうにも位置が把握できない。ベッドのないところに手を突こうとしてバランスを崩してしまった。

「うわっ!?」

「危なっかしいわね。ほら、こっちよ」

戸惑う圭介を見かねた彼女は自ら身体を倒し、手首を引っ張ってくれた。

「霞直さんのせいじゃないか」

しかし具体的な位置が掴めず、手探りで乳首を探しているうちに、胸そのものを見失ってしまった。

「えーっと、あれ？」

「や、はぁん……変なとこ触らないでよ……!!」

掌の下で、彼女の身が波打った。どうやら脇の下を掠めてしまったらしい。

「そ、そんなこと言われても見えないんだから……」

「ひゃあ！ い、いきなり!？」

「え、今どこ!？」

彼女が仰向けなのか、うつ伏せなのか、それすら分からない。しかし、予想外のところを触り、彼女に奇声を上げさせるのが、だんだん楽しくなってきた。

「もう、いつまで遊んでるの？ ここよ、ここ！」

ぐっと胸を掴まされた。今度こそ見失うまいと、柔らかい膨らみの谷間に、ぽふっと顔を埋める。触れている部分しか認識できないため、妄想の中で胸のボリュームが際限なく増えてきた。このまま全身が埋もれてしまいそうな幸福感に満たされて、柔らかい枕の感触を思う存分堪能する。

「何をニヤニヤしてるのよ？」

「うん。こうしてると……幸せなんだ。霞直さんと付きあえて、本当によかったって」

「……………」

返事がない。黙り込んでしまった霞直の表情を窺おうと、アイマスクに手を掛ける。

「ダメって言ったでしょ！」

手首を返され、ぐるんと仰向けにひっくり返された。こんなところで特技を披露されても、何が起こったのか把握できずに泡を食うだけ。ジタバタする圭介を抑え込むように、細いながらも張りのある脚が圭介の太腿を跨いだ。ぬるっとした液体を感じ、彼女が股間を湿らせているのが分かる。その油のようなぬるぬるが上の方に移動して、肉棒の裏筋をべったりと濡らしてきた。愛液でぬめる褌が、ペニスの先端を、ぬちよつと捉える。

「……………最後に、もう一度、ちょうだい？」

「最後？」

霞直の指がペニスを摘み、龟头を秘裂に擦りつけた。淫らな動きで腰をくねらせ、幹にも濡れた秘唇を這わせる。やがて、肉棒全体に彼女の匂いがする愛液をたっぷり塗りとけると、淫裂で龟头を捉え直し、とろつと蕩けそうな粘膜の中へと迎え入れた。ずるっずるつと、まるでペニスの感触を味わうように、ゆっくりと。

「ン……………」

そして、息を詰めて一瞬動きを止めると、一気に根元まで埋め込んだ。蜜壺の中へ飲み込まれた肉欲棒に、嵐のような快感が襲い来る。

「ふあっ！ は、ああああ……………！ か、霞直さんの、気持ちいい……………。とっっても熱くて、

ぬるぬるで、溶けちゃいそうだ……!」

「アタシも、アタシも気持ちいい。圭介のおちんちん、好き……!」

喘ぎながら、不自然に声が震える。しかし圭介は、腰を突き上げ、彼女を犯すことに夢中だった。ペニスを引き千切りそうな勢いの強烈な締めつけに、濡れた膣壁とカリ首が擦れあい、甘電流が早くも射精感に火を点ける。

「霞直さん! す、好きだ!」

圭介は彼女を求め、もがくように虚空に両の腕を伸ばした。霞直もその手を捕まえて、指と指を絡ませあう。

「アタシも、アタシも好き……でも……」

震える彼女の声と共に、ぼたぼたと何かが手に落ちて、二人の指を濡らした。

(涙——?)

「今日で最後……。圭介とはもう会わない。会えない……」

「え!?!」

突然の別れを切り出され、動きが止まる。しかし彼女は腰を振って膣肉にペニスを擦りつけ、快感の大波に溺れさせようとした。

(ふあ……すごい……気持ちいい! こんなに気持ちいいのに、こんなに好きなのに、どうしてもう会えないなんて言うんだ!?)

そんなことは嫌だと、圭介も彼女の胎内にペニスを撃ち込んだ。自分の気持ちを全てぶ



つけるかのようにな。

「ふあう！ つくああああああッ！」

ガバツと身を起こし、繋がったまま恋人の身体を抱き締める。あぐらの上に彼女を乗せると、霞直も圭介の頬に乳房を押しつけながら頭にしがみついていた。

「霞直さん！」

スペースの背中に腕を回し、離すものかときつく抱き締め、撫で回す。キスを求めて、彼女の髪を掻き乱す。だが、手触りがおかしい。何かが足りない。

(髪……短い?)

霞直の髪は、ポニーテールにしても、腰まで届こうかという長髪だったはず。それが、指に触れているこの髪は、細いうなじに触れられるほどのショートカット。

「け、圭介、アタシいく、イク、イクッ!!」

——くっちゅ、じゅっく！ くっちゅ、じゅっく！

白を捏ねるように腰で円を描き、ペニスを膣内で振り回す。その激しい甘摩擦に、圭介の意識も射精が最優先になってしまふ。

「ぼ、僕も、僕もイクよ、霞直さん！」

「はうあん！ 圭介、圭介、好きい！ アタシ……アタシ……イク、イクイク、ふああああああつ、ひ、ひあ、あ、あ、あああああああッ！」

絶頂快感に身体が強張る。肉棒から精を搾り取ろうとするように、貪欲な肉壺がキュウ

ウウウウツと収縮する。

「つあああッ！ そんなに締めたら、出る出る、か、霞直さん、くあ、出るうううッ!!」  
白濁液が再び彼女の子宮を叩く。暴れるペニスが膣から飛び出す。どびゆる、どびゆるどびゆと、精液が宙を舞う。

「あ……………あ……………」

精を放出しながら、痙攣する腰を霞直のお尻に打ちつけた。絶頂の余韻に身体が仰け反る。その拍子に、だった。激しい性交の末に、アイマスクが緩んで、するりと落ちた。明るくなった世界に見えたのは、飛び散った精液で汚される少女と、そして――。

「い、委員長!？」

全裸で圭介に跨がっているのは、セックスに乱れた朋華の姿。愕然とした。夢か幻を見ているとしか思えない。なぜ朋華がここにいるのか。霞直はどこへ行ったのか。

「ど……………どうして……………委員長が……………」

快感で紅潮していた彼女の肌が、顔が、見る見る蒼褪める。蕩けていた表情が、怖ろしいものでも見たように、凍りつく。

「いや……………いやあああああッ!!」

朋華は脱ぎ捨ててあった服を掻き集め、部屋から、家から、圭介から逃げ出した。床に置かれたクッションの上に、長い黒髪のカツラを、置き去りにして。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/本体690円(税込)

全国書店で  
好評  
発売中



織田(希莉香)信長、最大の危機!  
戦国武将の名を持つ美少女達が淫らにバトル!!

信玄、出陣!!  
小説：斐野嘉和 / 挿絵：SAIPACO

参

全国書店で  
好評  
発売中



吸血姫と狩獵者二人の影が闇を斬る  
隔月刊コミックヴァルキリーの人気連載漫画  
が特選のノベライズ!!

BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜  
小説：夜土郎 / 原作挿絵：渡瀬行人

△

既刊LINEUP  
全国書店で好評発売中

- 仙伝学艶戦姫ノブナガツ! ①～②
- 悪者姫なアダム ①～②
- 格闘! 帝部少女探偵団 赤い眼帯を巻いて!

- 借金の娘クリス ①～②
- プリンセスリバーシ! 交響する美姫と魔姫

- 無敵の姫騎士がDMCに目覚めたようです
- ビルグリムメイデン 深紅の溜り聖女

ビルグリムメイデンII

白装の騎士  
小説：狩野景 / 挿絵：ほちん



2010 3月 下旬  
発売予定!!

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!

ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18歳ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

